

## 授業「地域社会参加活動」の教育的効果に関する研究

### A Research of the Educational Effect Of 'Participation in Community Activities'

堀江 英一 相山 馨 本江 理子  
HORIE Hidekazu AIYAMA Kaori HONGO Riko

授業「地域社会参加活動」が、教育・保育・福祉の専門職をめざす学生にもたらしている教育的効果について、レポートや報告書に見られる学生の声や、授業後のアンケートをもとに調査した。その結果、この授業が学生の成長をもたらしているとともに、その後の実習や将来の進路決定に役立っていることがわかった。

キーワード：ボランティア

#### I 研究の目的

「地域社会参加活動」は、本学子ども育成学部が発足した当初から、1年生の必修2単位の授業として教育課程に位置付けてきた。学生たちは、4年間で小学校教諭一種免許、保育士資格、幼稚園教諭一種免許、社会福祉士国家試験受験資格、スクール・ソーシャルワーカー資格の中から複数資格・免許を取得し、卒業後は小学校教育分野、保育・幼児教育分野、福祉分野等の各分野に就職し、地域の担い手として活躍することが期待されている。「地域社会参加活動」は、そのような学生たちが学内の授業や学外実習のほかに、子どもの生活・発達とその育成環境である地域社会の現状と課題を多様なボランティア活動を通して学び、さまざまな人々が共に暮らし、子どもの生活を支えることのできる共生社会を考える視点を身に付けることを目的としている。

学生たちには、各ボランティア活動終了時に活動レポートの提出を義務付けている。レポートには、活動内容の報告のほか、活動を振り返っての感想も記入する。また、1年間の活動終了時には、最終活動報告書を提出させている。これにも、活動を始めた当初のボランティア活動に対する自分の考え方と活動を終えての自身の考え方の変化を記入させている。

これらの感想を見ると、学生たちが、さまざまなボランティア活動を通して、学内の授業や学外の実習だけでは得られない貴重な体験をしていることがよく分かる。年度当初、ボランティア活動を敬遠していた学生、集団の中に入って積極的に活動できなかった学生が、さまざまなボランティア活動の経験を積んでいくにしたがってその意義に気付き、思い描く未来の自分に必要な知識・技能の必要性を認識するようになり、自ら課題意識をもって意欲的にボランティア活動に携わろうとするようになっていく。

したがって、1年次に学外で地域のさまざまなボランティア活動を行うことは、教育・保育・

福祉の専門職をめざす学生にとってかなりの教育的効果をもたらしていると考えられる。本研究の中で、学生たちのボランティア活動に対する意識、集団の中での自らの関わり方、将来の職業を見通した課題意識についてどのような変容が見られ、それがその後の実習にどのように活かされるのかを明らかにしたい。

## II 研究の方法

- ・活動レポート等を通して、学生たちのボランティア活動に対する意識の変容を明らかにする。
- ・ボランティア先での聞き取り調査を通して、実際の現場で学生たちがどのような取り組みの変容を見せたのかを明らかにする。
- ・最終活動報告書を通して、学生たちのボランティア活動に対する意識の変容を明らかにする。
- ・活動を通じた学生たちの学びの内容を明らかにし、その後の実習にそれがどのように活かされるかを考察する。
- ・複数科目担当者による共同研究とする。

## III 「地域社会参加活動」実施概要

### 1. 平成 21 (2009) 年～平成 24 (2012) 年

前述のように、「地域社会参加活動」は、本学子ども育成学部が平成 21 年 (2009) に発足した当初から、1 年の必修科目 2 単位の演習科目として教育課程の中に位置付けてきた科目である。当初の概要について、『富山国際大学子ども育成学部紀要第 1 巻』(2010 年 3 月)に『「地域社会参加活動」の意義と課題』(室林孝嗣、本江理子、村上満共著)としてその概要がまとめられているので抄録する。

#### ◇授業の目的

「地域社会参加活動」は、教育課程の 3 つの特色「①子ども育成とその環境を一体的に捉える、②効果的な実践的専門教育を推進する、③『地域で学ぶ』『地域に学ぶ』『地域で育つ』」の③を実際に行うための授業であり、その目的を「富山の特色ある教育・福祉・保育の現場でボランティア活動に参加することで、地域社会とつながりをもつ社会の構成員としての自覚を持ちながら、子ども育成の現状と課題について学ぶ」とした。

#### ◇授業の内容 (2009 年度)

No.	月日	講義・演習	活動等
1	4/13	オリエンテーション	
2	4/20	障害児(者)と地域について	
3	4/27	子どもと家庭・地域について	
4	5/10	活動に向けて(障害者スポーツ大会準備)	
—	5/17		障害者スポーツ大会(雨天中止)
5	5/18	地域社会参加活動の取り組み方(1)	
6	5/25	地域社会参加活動の取り組み方(2)	

7	7/6	プレゼンテーション、課題レポート提出	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題レポート</li> <li>〈地域活動〉</li> <li>・活動レポート</li> <li>・最終活動報告書（～12/22）</li> </ul>
8	7/13	演習（課題レポートに基づく）	
9	10/5	第1回活動報告会	
10	11/2	第2回活動報告会	
11	12/7	まとめ（演習：活動を振り返って）	
12	1/18	最終活動報告書返却、アンケート調査	

## ◇時間数

- ・講義、演習 20 時間（=10 コマ）
- ・地域活動 20 時間（=10 コマ）
- ・合計 40 時間（=20 コマ） ※1 コマ=2 時間

## ◇地域活動

- ・20 時間（=10 コマ）以上
- ・一日の活動（6 時間）…一日 6 時間以上の活動
- ・一日 6 時間未満の場合は、実時間
- ・宿泊を伴う活動に参加する場合は、相談
- ・移動時間は含まない

## ◇活動の手順

## ①活動先の決定

②「活動届」「活動票（報告）」提出、担当教員が確認し、「活動票（報告）」を返却

③「活動票（報告）」を持って活動、終了後に確認の署名をもらう

④活動レポートを作製し、「活動票（報告）」をつけて提出、担当教員が確認し、返却

⑤返却された活動レポートは各自ファイリングする。

⑥活動をプレゼンテーションする。

⑥最終活動報告書を作成し、活動レポートとともに提出

## ◇最終活動報告書

- ・活動名、活動日時、活動先、活動内容
- ・活動前の自分
- ・活動後の自分
- ・自分にとっての地域社会参加活動の「意味」について

（以上、『『地域社会参加活動』の意義と課題』（室林孝嗣、本江理子、村上満共著）～『富山国際大学子ども育成学部紀要第1巻』（2010年3月）から抄録）

## 2. 平成 25（2013）年度～

平成 25（2013）年度より、活動先を教育・保育・福祉の 3 分野から 2 分野×4 時間、その他の分野（前述の 3 分野を含む）で 12 時間以上選択することとしている。これは、教育・保育・福祉の専門職をめざす学生が各分野に対する幅広い視点がもてるよう、在学中にさまざまな分野のボランティア活動を経験することを期待したからである。

## ◇内容

- ・講義、演習 30 時間 (1 コマ 2 時間=15 コマ)
- ・地域活動 20 時間以上  
(教育・保育・福祉分野から 2 分野×4 時間+3 分野・その他から 12 時間以上)

## ◇活動時間の算出方法

- ・一日の認定活動時間 最大 6 時間
- ・一日の活動時間が 6 時間未満の場合 実時間
- ・一泊 2 日 (基本パターン) (午後～翌日午前)  
=6 時間×日数+ (日数×1) 時間=6 時間×2+ (2×1) =14 時間
- ・基本パターンを超えるまたは連泊の場合  
=6 時間×日数+ (日数×2) 時間

- 例 ①一泊 2 日 (基本パターン) 14 時間  
 ②一泊 2 日 (基本パターンを超える) 16 時間  
 ③二泊 3 日 24 時間  
 ④三泊 4 日 32 時間

## ◇講義・演習内容 (2014 年度)

No.	月日	講義・演習	活動等
1	4/11	オリエンテーション	
2	4/18	活動に向けて (1)	乗鞍青少年交流の家紹介 富山YMCA紹介
3	4/27	活動に向けて (2)	立山青少年自然の家紹介
4	5/9	障害者スポーツ大会事前打ち合わせ	
—	5/11		県障害者スポーツ大会参加
5	5/16	スポーツ大会を振り返って (演習)	県異年齢生活体験推進事業 ボランティア紹介
6	5/23	活動の手順説明、活動開始	
7	6/26	講演「子育て支援って何？」(中村かおり氏)	大阪人間科学大学講師
8	7/4	活動に向けて (3)	活動体験者による発表を含む 課題レポート提出 「あなたにとってボランティアの 意義は何ですか」 「〇〇〇にとって地域社会とは何 ですか」
9	7/11	活動に向けて (4)	活動体験者による発表を含む
10	10/8	第 1 回活動報告会 (グループ内)	各グループ代表 2 名選出
11	10/22	第 2 回活動報告会 (代表 8 名)	1 人 8 分

12	11/5	第3回活動報告会（代表8名）	1人8分
13	11/19	第4回活動報告会（班代表9名）	1人8分
14	12/3	第5回活動報告会（班代表9名）	1人8分
15	1/7	最終活動報告書返却、アンケート調査	
	3/31		「活動報告集」発刊 新年度オリエンテーションで配布

◇活動の手順

- ①活動先を決定する
- ②「活動届・活動票（報告）」を提出する
- ③教員が確認、「活動届」の内容を一覧表に転記し、保管する
- ④不備がある場合は再提出させる
- ⑤「活動票（報告）」を持って活動する
- ⑥活動後、「活動票（報告）」に確認の署名をもらう
- ⑦活動レポートを提出する  
活動後1ヶ月以内  
「活動票（報告）」「活動の証（写真・要項等）」を添付する
- ⑧最終活動報告書を提出する⇒『活動報告集』発刊
- ⑨活動ファイル（最終活動報告書、活動レポート）を提出する

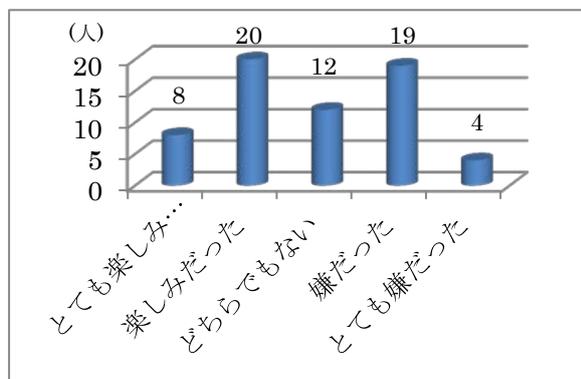
IV 活動に向けて

1. 活動前の学生たちの気持ち

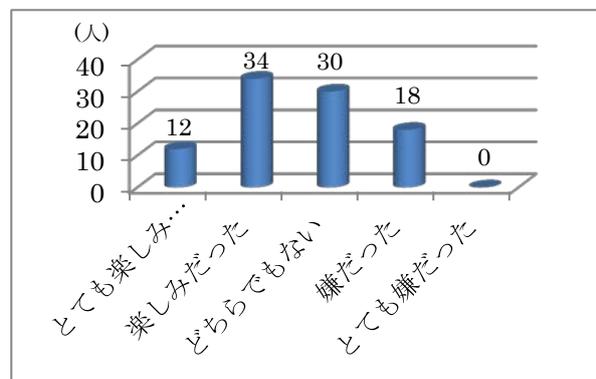
実際に活動を開始する5月前、活動に対して学生たちはどのような思いだったのだろうか。授業最終回に実施したアンケート調査では、次のような結果が見られた。（なお、2009年度のデータは、室林、本江、村上の前掲書による。以下同じ。）

Q. 活動前の心境はいかがでしたか。

2009年度



2014年度



2009年度および2014年度とも、「とても楽しみだった」「楽しみだった」の回答が多い。ま

た、2009 年度に比較して、2014 年度は「嫌だった」「とても嫌だった」の回答が減っている。これは、「地域社会参加活動」が始まってから 6 年が経過し、この活動が学生たちの意識の中に定着しつつあることの現れと見ることができよう。

では、具体的に学生たちはどのような思いを抱いていたのだろうか。『最終活動報告書』から種類別に抄録する。

#### ◆楽しみだった

- ・高校生の頃からボランティアをしたいという気持ちはあったが、ずっと実行することができな  
いでいた。この授業をきっかけにボランティアができるということで、喜びが大きかった。(女)
- ・初めてのボランティア活動にとっても期待を膨らませていた。多くの人と出会いたくさんの経験  
や学びのあるボランティア活動をとっても楽しみにしていた。(女)
- ・活動前の自分は、楽しみでうきうきしていました。それは、たくさんの初めて会う人と関わる  
ことができること、誰かの役に立つことができるということに嬉しさを感じていたからです。  
(女)
- ・子どもと関わっていくということに不安を感じつつも、子どもと早く関わりたい、一緒に活動  
したい、今の子どもたちの現状を知りたいという楽しみな気持ちの方が強かったと思う。(男)
- ・私は小学校の時にボランティア委員長をしていた。20 時間以上ボランティアをすると聞いた  
時には、嫌だ、面倒くさいといった不快感や嫌悪感はなく、むしろ早く参加したいと意気込んで  
いた。(女)
- ・高校の頃からしばしばボランティア活動に取り組んでいた。そのこともあって私はほかの人よ  
り経験があると思い、20 時間以上しなければならぬという話を聞いた時は胸が高鳴った。(男)

#### ◆期待していた

- ・ボランティア活動を通して教育、福祉、保育などの様々な分野について知り、自分の成長に活  
かしていきたいと思いました。(男)
- ・どれも自分の今後に生きてくるのだなと思い、積極的にいろんなボランティアに参加したいと  
思うようになった。(女)
- ・ボランティアに参加させて頂くからには、どの活動にも目標を持って参加しようと考えた。  
(女)
- ・ボランティアという機会を通して、私が大きく成長していけるのかは私のやる気次第であると  
考えていたので、誠意とやる気をもって一生懸命取り組もうと考えていた。(女)
- ・この講義を通してボランティア活動をする意味を明確にしたいと思った。そして、ボランティ  
ア活動を通して自分自身を変えていきたいと思った。(女)
- ・ボランティアとは子どもの命を預かり、今後の子どもたちの成長に大きな影響を及ぼすことが  
あると気付いた。その時、私は半端な気持ちでボランティアに臨んではいけないと思った。(男)
- ・20 時間以上のボランティアの中でどのようなことが経験でき、自分がどれだけ成長できるの  
だろうと思った。ボランティアを通して多くのことを学び、これからの生活に生かしていけるよ  
うな活動をしたかった。(女)

◆嫌だった

- ・あまりこの活動について乗り気ではなかった。ボランティアは志願者という意味があるが、活動前の自分は完全にやらされている感満載であった。(女)
- ・大学生になるまでボランティア活動というものに興味がなく、参加したこともありませんでした。単位のためとはいえ正直乗り気ではありませんでした。(男)
- ・正直なところ活動をしに行くまではなぜ強制的にボランティアに行かなければならないのだろうと思っていました。行きたい人が行きたい時に行けば良いのではないかと思っていました。(男)
- ・私は最初全然乗り気ではなかった。消極的な気持ちで、行きたくないと思っていた。ボランティアについて無関心だったし、ボランティアする意味がわからなかった。(女)
- ・ボランティア活動というものは恵まれている者が恵まれていない者へ何かしてあげようと手助けや援助をするもので、お金にもならないし自分には利益がなく時間の無駄だと考えていました。(女)
- ・正直ボランティアなんてあまりしたくなかった。慣れない環境で大学生活やバイトのことで頭いっぱいだというのにその上ボランティアなんて自分の時間がなくなってしまうという気持ちだった。(男)

また、『最終活動報告書』には、活動を前にして不安だったと述べている者が 99 人中 39 人と多い。初めての活動ということで学生たちは多かれ少なかれ不安を抱いていたことが分かる。

◆不安だった

- ・ボランティアとして利用者さんや参加者の子どもたちとどのように接したら良いかよく分からず、活動する前はとても不安でした。(女)
- ・障がい者の方のボランティアには少し抵抗がありました。うまく接することができるのかいつも不安でした。(女)
- ・ボランティア先でしっかりとボランティアをして、役に立つことができるのか、逆に迷惑になってしまうのではないかと、たくさんの不安を抱えていた。(女)
- ・地域社会参加活動で、自主的に 20 時間もボランティアに参加できるのか、それに伴って、レポートをしっかりと出すことができるのか、責任を持って取り組むことができるのか、と不安でいっぱいだった。(女)
- ・20 時間以上のボランティア活動を行うと知った時に、指定された時間のボランティア活動に参加して取り組んでいる自分が想像できず常に不安になった事を覚えている。(女)
- ・今まで自分からボランティアに参加したことがなく、どんなことをすればいいのかなどの不安でいっぱいでした。(男)
- ・ボランティア情報の掲示を見たが、なかなか都合の合う日もなければ、富山県のことをまだよく知らないということもあって地図を見ても分からず、電車やバスに乗ることが心配でならなかった。(女)

・人見知りをしてしまうので、人と関わるボランティアで迷惑をかけないか、うまくやっつけられるのか、などの不安も多くありました。(男)

## 2. 「地域社会参加活動」最初のボランティア体験～富山県障害者スポーツ大会を通して

このようなさまざまな思いを抱いている学生たちが、円滑に活動に入っていくことができるように、5月中旬に富山県総合運動公園陸上競技場で開催される富山県障害者スポーツ大会に、運営補助員として全員参加させ、活動の見通しをもたせるとともに、普段あまり接したことのない福祉分野にも関心をもたせるようにしている。学生たちの中には、高校生の時期にさまざまなボランティア活動を経験している者もいるが、「地域社会参加活動」におけるボランティア活動としては、最初の活動になる。

平成 26 (2014) 年度は 5 月 11 日 (日) に開催され、学生たちは競技担当・競技補助員 (競走、投てき、跳躍)、表彰担当員、運営担当員 (記録配布・掲示係、進入許可車係、招集係、ナンバーカード係、本部記録係) として大会運営に協力した。

参加後、次のような感想が見られた。

### ◆生き生きと競技する選手の姿に感動

・競技前に緊張していたり、仲間を応援したり、一生懸命走ったりして生き生きとしていた。自分よりも努力をしていて、頑張っていると思った。(男)

・参加者の方々皆がとても生き生きとした表情で大会を楽しんでおられ。私は皆さんに元気ももらい、今大会の補助員として充実した時間を過ごせたことをとても嬉しく思う。(男)

・目がほとんど見えていない方が、恐れを抱かず、果敢に走っている姿に感動しました。たとえ障がいがあっても、ネガティブにならず、意欲をもって競技に打ち込んでいるのを見て、自分も苦手なことをネガティブにとらえずに、果敢に挑戦してみようと思いました。(女)

### ◆選手の競技能力の高さに驚愕

・スラロームが行われていたが、あまりの速さに驚きました。(男)

・選手は皆競走している時、障がいがあるとは感じさせないほど、普通の人のような記録を出していました。(男)

・障害者スポーツ大会という名前でしたが、まったくそんなことを感じませんでした。50m走なんて、私より速い人が多くてびっくりしました。(女)

・障がい者の方の可能性をとて感じました。どの競技も、健常者の人と同じぐらい、もしくはそれを超えるぐらいの記録がいくつも出ていました。(女)

### ◆障がいがある人への見方・考え方の変化

・障がいがあるからできることが限られていると思っていたけど、そんなことはないの見方が大きく変わりました。(女)

・参加してみて気付いたことは、障がい者も普通の1人の人間だということ、何気ないことで笑い合えること、障がいがあってもそれを補おうとする努力があり優れた能力を持っていることです。(女)

・彼らが競技をしているところを見ていると、私たちのスポーツ大会とあまり変わらない気がします。また、勝って喜んだり笑ったりしているところも私たちと変わらない。彼らを障がい者と

して区別していた自分が恥ずかしい。(男)

◆障がいがある人と交流できて嬉しかった

- ・参加するまで、障がいがある方と接する機会がなかったので不安でした。しかし、名前を覚えてくれて、会った時に必ず声をかけてくれたのはとても嬉しかったです。(女)
- ・「ファイト！」と言ったら手を振ってくれてとても嬉しかったです。(女)
- ・仕事の合間には、競技に参加していた皆さんと会話をしてコミュニケーションを取ることができました。大学のことについて聞いてくれたり、自分たちのことも積極的に教えてくれたりして、とても仲良くなれました。(女)
- ・自ら話しかけてくれた人がいて、親しみやすい人ばかりで元気をもらいました。1人の人間として素敵なお方多いなと思いました。(女)

◆仕事ができるようになって良かった

- ・自分がちゃんと役割を果たせるのかとても心配でした。私がミスをすると、迷惑がかかってしまうだけでなく、怪我をさせてしまうかもしれないのでとても不安でした。最初はわからないことが多く指導員の方に教えてもらいましたが、後半になるにつれて仕事の内容も分かってきて、自分たちでできるようになったので良かったです。(女)
- ・活動の始めは、自分がどのように仕事をこなせば良いのか分からず、指導員の方に指示されて行動していたが、時間が経つにつれ、周りの状況を意識して次に自分がすべき仕事を見付けることができた。(女)

◆自分の力不足を認識し、次への課題意識をもつ

- ・一番印象に残っているのが手話でした。本当にすごいと思いました。耳が聞こえない人たちは、この手話を手がかりに言葉を理解しているんだと思うと、感動しかありませんでした。今日から手話に関心を持つようと思いました。(女)
- ・今回のスポーツ大会では自分の未熟さを痛感しました。自分のできることから力をつけていき、誰かを支えてあげられるようになりたいと思いました。(女)
- ・仕事は全力を尽くしましたが、不安も残ります。あの時の対応は正しかったのか、ちゃんと接してあげられたのかと色々な思いがあります。(女)

◆地域社会参加活動の意義を考える

- ・今回のボランティアは、人の役に立つためではなく、自分のために参加させて頂いたのだと感じています。今後、積極的に参加していきたいです。なぜなら、新たな発見が自分の見方や世界を広げてくれるからです。(女)
- ・この体験を通して、「障がいは1つの個性」という考えを持ちました。人はそれぞれ違い、それがたまたま人の助けを必要とするものに過ぎないと思いました。また、地域の人たちとの関わり、つながりの大切さということも学びました。このような素晴らしい経験をする場を与えて下さった先生、地域の方々、選手の皆さんには本当に感謝しています。(男)

◆将来の進路について考える

- ・私は福祉にはあまり興味をもっていなかったのですが、このボランティアを通して福祉関係の仕事もいいなと感じました。(女)

・将来社会福祉士になろうと考えているので、今回のスポーツ大会を通して、障がいがある人たちが懸命に走っている姿、そして好記録を見て、いろいろと参考になりました。そして将来は障がいのある人たちに寄り添って手助けしたいと改めて思いました。(男)

学生たちは、最初不安を覚えていた者が多かったようである。それは、障がいのある人と接した経験が少なく、どのように接したら良いか分からないという不安、初めての大会で果たして迷惑がかからないように自分の仕事をうまくやり遂げることができるかという不安である。

ところが、選手の方々が真剣に競技に取り組んでいる様子、生き生きとして競技を楽しんでいる姿を目の当たりにし、その不安が取り除かれていく。そして、スラローム競技のように大変な速さで走ることができる選手や、目が見えなくても聞こえてくる音を手がかりに真っ直ぐ前に走ることができる選手の姿を見て、その能力の高さに驚愕する。

また、気さくに声を掛けてくれたり、感謝の言葉を述べてくれたりする選手が多く、障がいのある人たちと交流できる楽しさを味わった学生も多い。

大会運営補助員として次第に仕事に慣れスムーズに体が動くようになっていくなかで、学生たちは自分に不足している力に気付くようになる。なかでも、最も多かったのは手話に関する感想であった。指導員の方たちが、耳が聞こえない人たちと手話を通してコミュニケーションを図っている姿を見て感動し、自分もできるようになりたいたいと書いている学生たちが多かった。

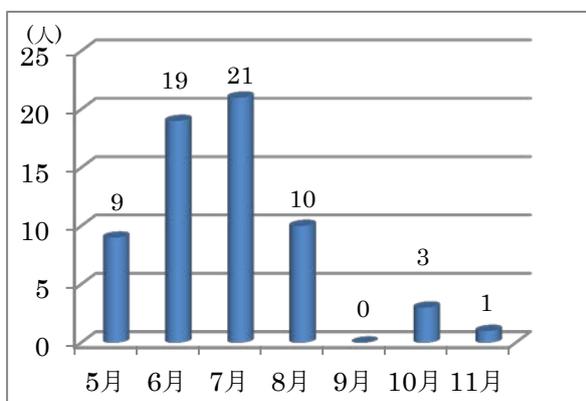
全体を通して、大会に参加して良かったとする学生が多かったように思われる。運営補助員として障がいのある人たちと一緒に活動するなかで、障がいのある人たちに対する見方や考え方が変わり、逆に彼らから元気をもらい、充実した時間が過ごせたと書いている学生が多かったのである。そして、これからもさまざまなボランティア活動に取り組みたいと書いている学生も少なからずいて、「地域社会参加活動」で取り組むボランティア活動の動機付けとして大変意義のある活動となっていることは確かである。

### 3. 活動を開始する

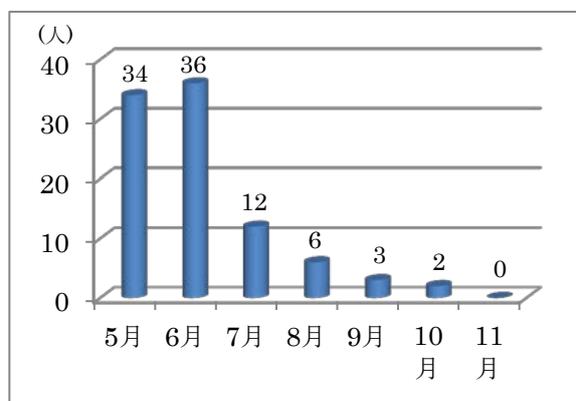
富山県障害者スポーツ大会でのボランティア体験を終えて、学生たちはいよいよ活動を始める。

Q. 活動先を探し始めたのはいつですか。

2009年度



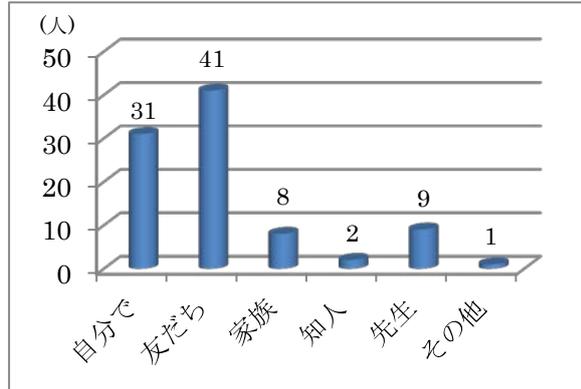
2014年度



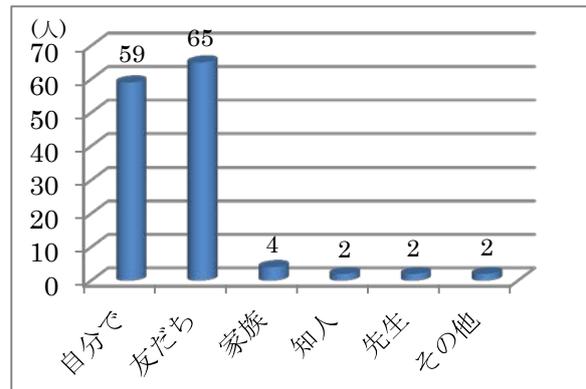
2009年度と比較して、2014年度は比較的早い時期から活動先を探すようになってきている。

Q. 活動先は誰と決めましたか。(複数回答可)

2009 年度



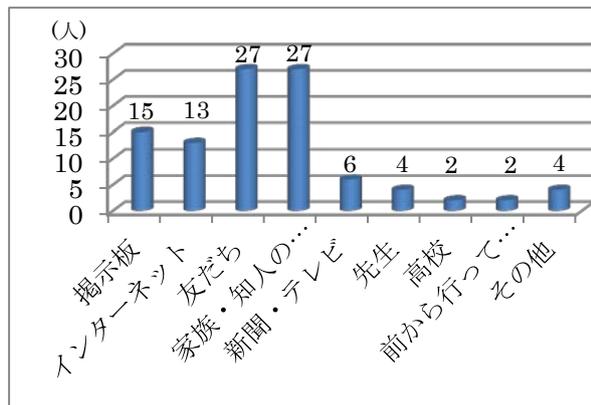
2014 年度



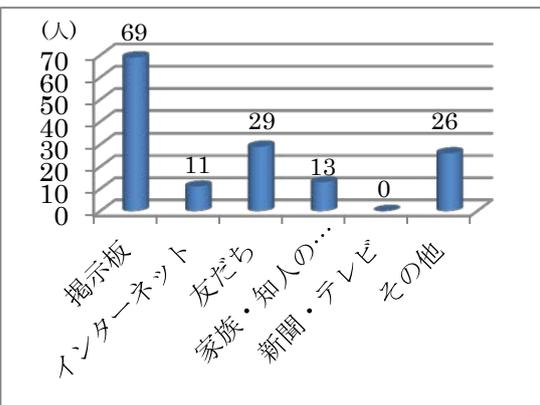
2009 年度および 2014 年度ともに、「自分で」「友だち」という傾向に変化は見られないが、「先生」が減少している。

Q. 活動先はどのように決めましたか。(複数回答可)

2009 年度



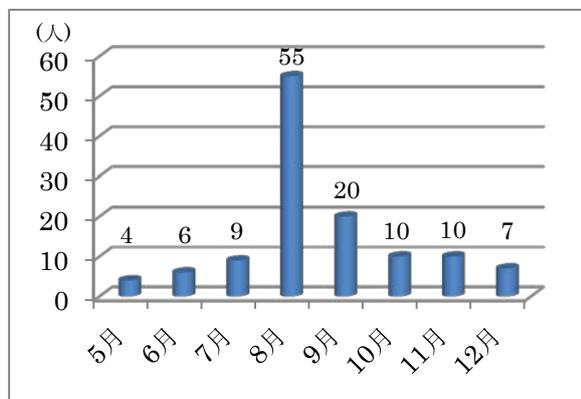
2014 年度



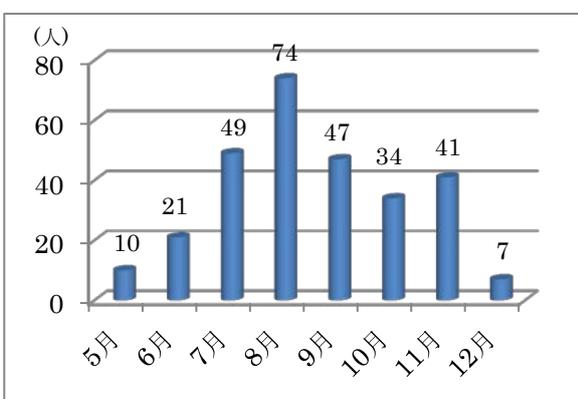
2009 年度は、「友だち」「家族・知人の紹介」「掲示板」が多く、2014 年度は「掲示板」「友だち」が多い。「その他」は、教員からのボランティア募集案内のメールがほとんどである。

Q. 活動時期はいつですか。(複数回答可)

2009 年度



2014 年度



2009 年度は 8 月が圧倒的に多い。2014 年度は 8 月を頂点として山状のグラフになっている。

これは、比較的早い時期から活動を開始したこと、本学の活動が知られるようになり、施設イベントが多い秋季にもボランティアの依頼が多くなったことが理由と考えられる。

また、ボランティア活動を何回か重ねるうちにその魅力に気付き、1人で何回も活動を行った学生が増えていることも理由と考えられる。

## V ボランティア体験に見られる教育的効果

富山県障害者スポーツ大会でのボランティア体験を終えると、学生たちはいよいよさまざまなボランティア活動に参加していく。活動レポートからは、学生達が活動を通してさまざまなことを感じたり気付いたりしたことが見て取れる。

5月31日(金)に社会福祉法人富山国際学園福祉会にながわ保育園で開催された「家族保育参加(パステルクラブ)『みんなで遊ぼう!』」に参加した学生の活動レポートには、次のような感想が見られた。

### ◆保育所の生の姿を初めて知った

・私は保育所のボランティア活動に初めて参加したので、参加する前までは園児の様子や職員の方々の働く姿を見たことがなかった。園児は、普段保育所では親と一緒にいるわけではないので、親と一緒に遊ぶことができ嬉しそうな園児の姿を見ることができた。(女)

・作品作りでは、1人1人が自分の考えやこだわりをもって作品を作ることができているなど、さまざまなことができるということを子どもたちを観察して気付くことができました。また、それぞれの年齢の子どもたちの特徴などについてももっと知りたいと考えました。(女)

### ◆子どもたちが楽しく生活できるための環境構成に気付く

・保育所には保育所の先生方によって子どもたちが楽しく、安全に遊ぶことができる工夫がたくさん施されていることを実際に保育園に行ってみることができました。(女)

・片付けの時に、普段の保育室の様子を見ることができた。棚を組み合わせて小さい部屋のようなスペースがあったり、お絵かきに使ったパイナップルの葉を育てていたりするなど面白いものがたくさんあり、保育士の方々のさまざまな工夫がなされていると感じた。コーナー補助の活動以外でも、きらきらボックス作りや花セラピーなどを体験させてもらい、子どもたちと同じことをしながら、子どもたちがどのように楽しんでいるのか見たり考えたりできて良かったと思う。(女)

これらの学生は、子ども育成学部をめざして入学してきてはいるが、まだ観察実習の経験もなく、実際の保育所の現場の姿を知らない学生である。その学生たちが、ボランティア活動を通して、子どもたちが嬉しそうに親と遊んでいる姿を目の当たりにし、現場の先生たちが子どもたちが楽しく安全に活動できるようにさまざまな配慮や工夫していることを知る。彼らにとってこれは、その後の実習の前段階として保育所の実態を知ることができたという点で意義のある活動であったことが分かる。

6月14日(土)に障害者支援施設野積園で開催された「スポーツフェスタ2014」にボランテ

ィアとして参加した学生の活動レポートには、次のような感想が見られた。

◆和やかな雰囲気に心温まった

・私は今回競技準備の担当だった。競技の補助をしている中で利用者さんの笑顔を見ることができ、私自身とても楽しくなりました。(女)

・探し物ゲームでは、なかなか探し物が見付からない時には、色団関係なく会場全体で一緒に考え、探していたので心が温かくなった。誰かから指図されたわけでもないのに、自然と助けてあげることができる環境ができており、心の輪が見えた気がした。(女)

◆運営側の工夫に気付く

・施設側は、外で運動している気分を味わえるように窓やドアを開けたり、運動会の気分を感じることができるように装飾による環境作りをしたりして、利用者の方のために細かい点にまで気配りしているのだと思いました。(女)

◆自分に不足している力に気付く

・ボランティアの中で反省点も多くありました。私は、1人1人との関わりを大切にすることしか意識していませんでしたが、現場ではそれと同時に仕事の速さも求められることを実感しました。(女)

・保護者の方にお話を伺う機会があった。自分ができることは極力自分でさせて見守り、本当の助けが必要だと感じた時には手を差し伸べるようにすると言っておられた。むやみやたらに手を貸す・サポートすることだけが良いことではなく、本当に助けを必要としているのか、手を貸しているのかなど、状況に応じてしっかり見極めてからサポートに移ることが大切だと感じた。まだまだ自分には備わっていない力だと思うので、今後参加するボランティア活動の中でたくさんのことを身に付けていきたいと思った。(女)

これらの感想からは、障がいのある人たちと心が通じ合った嬉しさ、周囲の温かい雰囲気に好感をもつとともに、利用者の方々が楽しく競技できるような環境作りの大切さや運営側の留意点に気付いていることが分かる。また、障がいのある人とどのように接したら良いかについても学んでいる。

また、6月15日(日)に富山市体育文化センターで開催された「第12回富山市障害者フライングディスク大会」(富山市身体障害者福祉協議会主催)にボランティアとして参加した学生の活動レポートには、次のような感想が見られた。

◆和やかな雰囲気に心温まった

・参加者同士が互いに声援を送ったり、一緒に喜んだりしている姿に、単純に競うだけではなく、コミュニケーションの場になっているのだなと感じました。(男)

・大会に参加して、参加者の障がい者の方々がとてもいきいきと活動していて会場が盛り上がっていていいなと思いました。後片付けをしている時に、スタッフの方に「今日はありがとう。また、ボランティアに来て下さい」と声をかけて頂き、とても嬉しかったです。(男)

◆自分に不足している力に気付く

- ・今回の反省点は、言われたことをやるだけで、自分から行動する場面が少なかったことです。今回の反省を生かして、積極的に仕事を見付け、手伝っていきたいと思います。(男)
- ・私はあまり人と関わらない場面では積極的に動くことができたのですが、他の点では消極的であまり積極的に動くことはできませんでした。後で振り返って後悔しました。この反省を生かして、すべてにおいて積極的に動けるようになりたいです。(男)
- ・会場準備では、指示された仕事しかしておらず、次の指示が出されるまで、周りを見てただ立っているだけであった。このような場所では、何も言われなくても自分で次の行動を考えそれを実行に移す、それくらいのことが普通にできないと、ボランティアをしている意味がないと感じた。私は人と話す時緊張してしまい、笑顔を出すことも苦手である。この短所はボランティアの場において致命的なことであり、自分の経験不足、未熟さを感じた。私は、言われたことをやるだけで自分からは何も行動せずに、選手の方たちともうまく接することができないという、自分にまったく足りていない点、必要なものを多く発見した。(男)
- ・前回のボランティアでも誘導係をしていた。その経験を生かそうと今回の誘導係はより一層気合いが入った。選手の名前を確認したり、声かけをしたりすることは少し成長できたかなと思う。しかし、運営スタッフさんと比べればまだまだだ。緊張せずに自然に話しかけたり、話しかけられたりする関係になりたいと思った。(女)
- ・1つ反省したのは、スタッフの人が1人1人に声かけを変えていたのに、私は「惜しいです」とか「さすがです」としか言えなかったことです。保育や福祉の現場でもこういった声かけは大切です。もっと声かけのレパートリーを増やさなければいけません。ここのスタッフの方たちは参加者の方と本当に心を通い合わせておられて、私もそんな存在になりたいです。(女)
- ・今回の反省点は、活動に必要な知識を事前に調べていなかったこと。フライングディスクとは何だろうと行く前に思っていた。事前に調べていれば、準備の時、運営スタッフさんに頼ることなく、自分から動くことができたはずだ。行ってからどうすればいいのだろうではなく、行く前にこうすればいいのかなと考えておくことが必要だと思った。(女)
- ・フライングディスクという競技を下調べせずに行ったので、会場に到着してから何をすればいいか分からず戸惑いました。次からは、しっかり調べてどのようなボランティアでどんな人が参加しているか内容をつかむことが大事だと感じました。(女)
- ・体が不自由で自分の思った通りに動かせないのは、とてもかわいそうです。でも、ボランティアをやっている時はそのようなことを思わず普通の人と同じように接する方が障がい者の方にとっても嬉しいと思います。このボランティアに参加することができて良かったです。(女)

これらの感想においても、「スポーツフェスタ 2014」と同様な感想が見られる。現場の和やかな雰囲気、参加者の楽しそうな姿に触れ、心が通じ合った嬉しさを経験するとともに、運営スタッフとして障がいのある人との接し方、次のことを考えた素早い行動力など、自分に不足している能力を実感している。

7月に入ると、さまざまな施設からボランティア派遣の依頼が入る。その主なものは地域や施設主催の夏祭りである。

7月6日(日)に射水市小杉体育館で開催された「きらり夏祭り」(NPO法人こすぎ総合スポーツクラブきらり)に、受付、小学生のスポーツ・工作体験の補助員ボランティアとして参加した学生の活動レポートには、次のような感想が見られた。

#### ◆子どもたちとの心の交流が嬉しかった

・主にスタンプを押してあげていたが、そこでたくさんの子とも関わられた。スタンプを押してあげて「ありがとう」と笑顔で言ってくれる子もいれば、母親や父親に「ありがとうは？」と言われて恥ずかしそうに「ありがとう」という子もいた。そのような姿を見ていて、私もなかなか「ありがとう」などを言うことができなかつたなど、昔の自分を思い出した。子どもたちにどのような形でも「ありがとう」と言ってもらえて、私はとても嬉しかった。(女)

・私は、今回のボランティアで気を付けていたことがある。それは、子どもと同じ目線で話すことである。そのようにして声をかけるとニコッと笑顔を向けてくれたのでとても嬉しかった。(女)

・今回の現場では、子どもたちが多かったため、常に笑顔で子どもたちと接することができたのは良かった。笑顔でいると子どもたちも心を開いて話しかけてくれ、「お姉ちゃんと対戦したい!」と言ってくれる子もいて非常に嬉しくなった。(女)

#### ◆スタッフの姿から、自分の力不足を感じる

・スタッフの方々は、子どもたちが楽しめるように、そして自分たちも楽しめるような場を作っておられたし、この夏祭りがよりよい行事になるように努めておられた。そのような方々と今回一緒にボランティアができて良かったし、このような方々に自分になりたいと思った。(女)

・今回、改めて子どもたちに対してどう接するのかを学ぶことができた。スタッフさんたちの言葉や行動が、すべての子どもたちが夏祭りを楽しむためにはどうしたら良いのか考えているということがよくわかった。(女)

・私たちがどのように行動すれば子どもたちが楽しんでくれるのか、来年もまた夏祭りに来たいと思うのかということまでは考えが届かなかったことが、自分の未熟なところでもあると思った。(女)

・実際に保育の現場に出ると想像を超えた出来事が起こる場合があると思う。そんな時に私たち保育者がどのように考えて行動できるのかという「臨機応変な対応」が求められると思う。自分にはその力が身に付いていないと実感した。(女)

・私のチームの男の子は少し乱暴だった。男の子のすることすべてに構っていたら進行に支障が出るので、だめだと思ったことは叱り、ある程度受け流していた。すると、競技中盤、1人の男の子が「さっきはごめんなさい」と謝りに来た。きっと、運営スタッフさんが助言をして下さったのだろう。さっきまでやんちゃだった男の子が本当に申し訳なさそうに謝ってきた姿に私は感動した。今、この子は少し成長したんだなと思った。実際の小学校では、このような成長が毎日どこかでたくさん起きているのだと思うとすごいなと思う。(女)

・今回のボランティアでは、なかなか自分から進んで仕事を見付けて動けなかったことが反省点だと思う。ボランティアでは、誰かに言われたことをするだけではなく、自分で考えて行動することが大切である。今後そこを改善していけるように頑張りたい。(女)

◆参加者の様子から地域の中でのつながりの大切さに気付く

・今回このボランティアに参加してみて驚いたことは、なんて活気にあふれているのだろうかということだ。子どもだけでなく大人も高齢者もさまざまな層が1つの建物に集まって楽しんでいる。あまり見ることがない機会だった。交流する機会も失われつつある中で、このような機会があることは良いことだと感じた。地域の活性化にもつながるし、自分たちが住んでいる地域を違った角度から見直すことで新しい発見にもつながった。(女)

7月27日(日)に特別養護老人ホーム・のむら藤園苑で開催された「夏祭り」に、模擬店手伝い・会場見守りのボランティアとして参加した学生の活動レポートには、次のような感想が見られた。

◆自分の力不足を感じ、スタッフの姿から学ぶ

・会場の見守りをしながら気付いたことは、「職員の方と利用者さんとの心の距離」だ。職員の方は利用者さんと心が通じているかのように、非常に親しげに話をされている様子が見受けられた。話す際には、職員の方は必ず視線を合わせて話しかけている様子が見られた。これは保育士の方が子どもたちに行っていることと同じで、相手に自分の意思をきちんと伝えようとして行っていることであり、重要なことであると感じた。(女)

・福祉の仕事は一日では務まらないものだと思った。日頃からずっとそばにいるからこそ利用者さんと気持ちが通じ合い、利用者さんの変化に気付くことができる。一日限定のボランティアでは分かり合うことができないことだと思い、少し寂しくなった。将来、福祉の現場に出ることになったら、利用者さんのことを一番に考え、共に生きていけるような人になりたいと思う。(女)

・今回のボランティアで3回目でした。3回目だから何でもこなせるのかなと思っていました。でも、棒立ちの時が多かったです。施設におられるおばあちゃんがいきなり「今から市役所行ってくるちゃ」と言われて、私がどのように返事するか考えていた時に、職員の方が「今日は日曜日やからやってないが」とすぐに対応しておられてすごいなと思いました。そこで私は、改めてまだまだ力が足りないを実感しました。(女)

・施設の職員の方の仕事をしていると、皆さん忙しそうということが第一印象でした。ですが、その中でも職員の方は、利用者さんへの声かけを絶えず行っておられました。どんなに忙しくても笑顔で接しておられる姿がとても印象的で心に残っています。利用者さん1人1人に声をかけるということは、忙しい中では大変なことだと思います。それを疲れた顔もせず笑顔で明るく声をかけておられて、すごいなと思いました。今回、施設の職員の方から学ぶことがたくさんあったので参加して良かったと思っています。(女)

・ボランティアとして来ているのだからもっときちんとしなくてはいけないと思い、積極的に利用者さんのところに行き自分の仕事をこなしました。それでもやはり職員さんのように仕事をこ

なすことはできずまだまだ学ぶことがあるのだと実感しました。(男)

7月12日(土)及び19日(土)に、社会福祉法人海望福祉会・特別養護老人ホームあんどの里でレクリエーション補助のボランティア活動を行った学生からは、次のような感想が見られた。

◆ボランティアを通して福祉のあり方を考えた

・このような仕事をしている周りの方に聞いてみると、体力的にも精神的にも大変だと言っておられた。これからもっと深刻な高齢社会になっていき、介護が今まで以上に必要になってくと思う。何かしらの対策をとらなければいけないのではないかと改めて思った。(女)

7月12日(土)～7月13日(日)にかけて開催された「夏の集い『キッズチャレンジ真夏の大冒険!』(富山県呉羽青少年の家主催)は、小学4年生から6年生までの児童がテントに泊まりながら、野外炊飯や月光ハイク・池遊び・ザリガニ釣りをを行う事業である。ボランティアとして参加した学生からは次のような感想が見られた。

◆自分の力不足を感じ、スタッフの姿から学んだ

・開会式では、職員の方が短い言葉で自己紹介をされていたが、笑いを取っており、自分にはまだまだ足りないと感じた。子どもの心をぐっとつかむような自己紹介も1つの技術であると思う。(女)

・1泊2日という短い間だったが、子どもと関わる仕事がいかに体力を使う仕事であるかということ学ぶことができた。子どもと一緒に体験することで体力を使い、子どもの考えることを先読みしたり、言葉遣いや子どものことを考えて言葉を考えたりとさまざまなことに気を配っていると心のメンタルの方も負担が大きかった。心身共に疲れるとはこのように言うのかと思った。小学校の教員を目指しているので、いい経験となった。経験を通すことで今まで知らなかったことがたくさんあるということを知ることができる。まだまだ足りないことが多いと感じた。(女)

8月から9月の終わりにかけては、夏期休業の時期であり、学生はさまざまなボランティア活動に参加できるようになる。この時期に学生たちが参加したボランティア活動について、教育・保育・福祉の各分野で学生たちが感じたことを活動レポートから抜粋する。

■教育分野

◆児童の実態を知ることができた

・学童には小学校1年生から3年生までいたが、その中で男の子の集団ではもうすでに上下関係ができていることに驚いた。(女、2014.8.20、前沢学童保育会)

・子どもたちには感情をそのままぶつけてくる子もいれば、なかなか自分の気持ちを素直に表せ

ない子もいるため、子どもたちの性格を十分に理解して声を掛けることが大切であると感じた。そして、子どもたちと遊んでいる中で感じたことは、子どもたちの発想力の豊かさである。どうやったら楽しい遊びになるのかを考えて、いろいろな道具を使ったり、場所を使ったりして遊んでいた。(女、2014.8.18、あさひ野っ子放課後児童クラブ)

・子どもたちと接する上で、子どもたち1人1人に特徴があるなと思った。とてもおとなしい子もいれば、とても賑やかな子もいるし、切り替えが速い子もいれば、ずっとしゃべっている子もいる。その子に合わせた対応が必要である。(女、2014.8.28、木津っ子のびのびクラブ主催学童保育)

#### ◆子どもたちの成長に感動した

・これまでの3泊4日のことを振り返り、みんな、最初会った時と帰る時では、顔つきが変わっていて、逞しくなっていて感動した。こんなにも間近で子どもの成長を見ることができるとは思っていなかったから、とても勉強になったし、また来年もできるならやりたいと思った。(女、2014.8.18~8.21、名水の里くろべ こども自然体験村)

#### ◆準備や対応の仕方を学んだ

・子どもたちが活動する場所や遊ぶ場所を前もって把握おき、掃除をしたり危険なものがないか確認したりして環境を整えておくことが必要なのだと知りました。また、叱ることの大切さも学びました。子どもたちに駄目なことはだめだと 2014.8.18~8.21、名水の里くろべ こども自然体験村)ちゃんと教えてあげないと将来困るのは子どもたちなのだと気付きました。(女、2014.8.21、夏休みおやべっ子教室あそび塾)

・今回、ボランティアに参加させていただいて気付いたことはたくさんある。一つ目は、会った瞬間から顔と名前を一致させること。二つ目は、子どもたちの体力や体調を十分把握した上で活動することである。(女、2014.8.18~8.21、名水の里くろべ こども自然体験村)

・今回のボランティアで、班のリーダーとして子どもたちと一緒に活動し、ただ楽しむだけでなく、子どもたちの健康と安全に気を配ることがどれだけ大切かがわかりました。(女、2014.8.18~8.21、名水の里くろべ こども自然体験村)

### ■保育分野

#### ◆子どもの実態を知ることができた

・子どもたちが楽しそうに遊んでいる姿を見て、どんな形であっても、子どもと関われることは、とても楽しいし、ありがたいことだと思った。(女、2014.8.23、にながわ保育園・夕涼み会)

・子どもたちの好きなものが、年によってとてもわかりやすいものであることを強く感じた。年少さんから年中さんくらいの男の子は飛行機や車のおもちゃを多くの子が好み、また虫のおもちゃが好きな子も多かった。女の子は、カチューシャのセットやゴムのブレスレットを好んでいた。年長さんでは、男の子はポケモンのめんこやルービックキューブ、ヨーヨーを選ぶ子が多かった。女の子はシールなどを好んでいた。全体を通して好き嫌いがなかったのは、団扇やミッキーなどの付箋であった。(女、2014.8.23、にながわ保育園・夕涼み会)

・今回の活動で子どもたちの感性に驚かされた。子どもたちは遊戯室で大きい積み木のようなも

のを使って何かを作っていた。「お姉ちゃん先生見て！ 恐竜の家だよ！」と言われ見てみるとその中にはボールがたくさんあり、「まだまだ卵集めるぞ！」と言って子どもたちは夢中になって遊んでいた。私はボールを恐竜の卵と見て遊んでいるなんてとても感性が豊かだと思った。

(女、2014.8.14、にながわ保育園・園内での活動)

#### ◆自分の力不足を認識した

・おもちゃの取り合いで子ども同士が喧嘩になった時、頭の中ではこうすることがいいと思っても、いざ子どもを目の前にすると頭の中で考える理想通りにはいかない。そんな時、慌てず冷静に叱り、助言をする現場の保育士さん、すごいなと思った。私はまだ未熟な学生だなと思った。ショックだけど、そこから私も成長していきたい。(女、2014.8.14、にながわ保育園・プール遊び)

#### ◆施設の円滑な運営のための環境構成に気付いた

・園内の片付けも大変参考になった。椅子にそれぞれの部屋のビニールテープを貼っておき、扉の色と同じ所に片付ければ良いようになっていたり、どの場所に何を仕舞ったらまた次も使いやすくなるかを考えてあり、園の先生はすごいなあと改めて感じた。(女、2014.8.23、にながわ保育園・夕涼み会)

#### ◆挨拶の大切さに改めて気付いた

・運営補助として参加し、改めて挨拶は大切であることを理解した。挨拶をすることで、自然と園児や職員との会話に繋がる。園児や職員と会話をするためには、日常生活での挨拶が重要であることも分かった。(女、2014.8.23、にながわ保育園・夕涼み会)

#### ◆保育士の仕事内容が理解できた

・私は保育士の仕事内容、また子どもと接する時はどのようなことに注意するのかなど、さまざまなことを知ることができました。この3日間を経て、保育士という仕事の大変さ、またやりがいを知ることができました。(男、2014.8.13、にながわ保育園・プール遊び)

### ■福祉分野

#### ◆障がいのある人たちについて理解を深めた

・高志ライフケアホームさんのボランティアに参加して、障がいがあっても、私たちと何も変わりはないと改めて実感しました。障がい者スポーツ大会に行った時も思ったように、障がいを持った方でも私たちと同じように嬉しい、楽しい、悲しいと感じていて、みんな同じなのだと思うのと同時に、たくさんの方にそれを知ってほしいと思いました。そして、1人でも多くの方に偏見を捨て、見方を変えてほしいと思いました。(女、2014.9.27、障害者支援施設高志ライフホーム・施設イベントあつまらーれ)

#### ◆自分の力不足を認識した

・一緒に作業している施設の方を見ると、利用者さんと会うたびに必ず何か話しかけたり、仲良く会話をしておられた。私は話しかけるのが苦手で口数が減ってしまうため、十分にコミュニケーションを取ることができていないと思った。(女、2014.8.30、ゆりの木の里納涼祭)

・利用者さんは普段あまり外に出ることがないので、納涼祭が終わる前に疲れて部屋に戻られる

方がほとんどだった。利用者さんの小さな変化にも素早く気付いて部屋に運ぶスタッフさんはすごいなと感心した。人の命を預かる責任ある仕事だと改めて感じた。(女、2014.7.26、特別養護老人ホームすずらん・納涼祭)

◆施設利用者との交流を大切に思った

・実際に利用者の方とお話をする自信はなかった。だが、実際に話してみると、とてもお元気で長く生きている分だけの知識があるのだなあと感じた。やはり、長生きをしている方とお話をするというのは、とても有意義であった。このような職に就くならば、学校で知識を得ることももちろん大事であるが、実際に何度も足を運んでみて、話すことが一番大事であると感じた。

(女、2014.8.11、特別養護老人ホーム越之湖・車椅子清掃)

・97歳のおばあちゃんは満州国で看護師をしていたことを話してくれた。満州国には中国人や韓国人、ロシア人が沢山いたようだ。そのためその国の言葉を覚えていないと治療のしようがないため、言葉を一生懸命覚えたと言っておられた。日本史で満州国については習っていたが、実際に体験した人から話を聞くとまた違った側面が見えてくると思った。さまざまな人から話を聞くことで人生観や経験してきたことをその人の話から知ることができるので面白かった。(女、2014.8.25～8.29、このゆびと一まれ茶屋・サマーボランティア)

・高齢者の方や障がい者・障害児や健常児そして職員の方々やアルバイトの学生など年代を超え、障害の有無に関係なくみんなが1つの場所に集まり時間を過ごす空間はとても温かいと思った。ボランティアを通して沢山のひとと交流し関わる機会があるということは、私の将来に対しても大きな影響を与えらると思う。将来必ずと言っていいほど人との関わりが重要になるのでいい経験になったと思う。(女、2014.8.25～8.29、このゆびと一まれ茶屋・サマーボランティア)

後期の授業が始まる10月からは、各施設で秋の行事が土日開催されるようになる。12月には最終報告書の提出を義務付けているため、実質的には10月と11月の2ヶ月間が「地域社会参加活動」としてのボランティア活動の最終活動時期になる。ただし、この時期は、福祉分野のボランティア参加者が多く、保育分野の参加者が少ない傾向にある。教育・保育・福祉の各分野で学生たちが感じたことを活動レポートから抜粋する。

■教育分野

◆子どもたちの実態を知った

・今回のキャンプに参加して気付いたことは、子どもたちは1つのことに集中してしまうと、他のことに気が回らなくなってしまうため、こまめに声をかけてあげることが必要だと思った。今回は気温が涼しかったということもあり、子どもたちは水分補給をせずに思いっきり走り回っていた。私たちが声をかけなければ、子どもたちは水分補給をしないということを知った。(女、2014.10.25～10.26、黒部市ふれあい交流館「あこや〜の」・なかよし合宿秋の集いパート1)

◆子どもたちへの接し方を学んだ

・今回GL(グループリーダー)を組んだのがWで、Wの子どもに対する接し方や時間の使い方など、すべて見習わなければならないことが多くわかった反面、自分のできなさが分かった。子

どもが頑張ったことは素直に褒めたり、一緒に喜んだりすること。反対に子どもが悪いことをした時には、きちんと注意し、何がいけないのか、どうしなければいけなかったのかなどを子どもに伝えていた。(女、2014.10.4、立少ボランティアの会主催国立立山青少年自然の家・WA!んぱくキッズのもりもりキャンプ)

#### ◆行事運営上の留意事項に気付いた

・今後気を付けていかなければならないなと思ったのは、年齢に差がある子たちが同じ活動の時にいかに一緒に楽しく活動できるかということです。できることが体格や知識などで変わってきてしまうので、私たちがいかに工夫していかなければならないかがはっきりしました。全員が同じように楽しく遊べるために、新しいルールを作ったり補助できるようなことを考えたりさまざまな工夫が大事だなと思いました。(女、2014.11.1、富山YMCA堤町本館・地球っ子活動)

・前泊の準備の際は、子どもの体調管理であったり、状況の把握であったりと、子どもと一緒に2日過ごすとなると、私たちが知っておかなければならないことが多くあるのだなと思った。

(女、2014.10.4、立少ボランティアの会主催国立立山青少年自然の家・WA!んぱくキッズのもりもりキャンプ)

### ■保育分野

#### ◆子どもたちの実態を知った

・保育の面では、子どもたちとたくさん関わることができて、幼稚園実習が楽しみになり、保育の練習にもなったと思う。そして、子どもたちの今好きなキャラクターについて知っておかないといけないことにも気付いた。知っておくことで、子どもたちとのコミュニケーションの取り方も変わってくると思った。(女、2014.11.8、こもれびの里・こもれび祭)

### ■福祉分野

#### ◆施設の温かな雰囲気に感動した

・福祉の面では、まず施設の雰囲気が良かった。スタッフの方と利用者さんが仲が良く、利用者さんは、私たちが施設に行った時から私たちに声をかけて下さった。「おはようございます」と大きな元気のいい声が朝から飛び交っていて、終わった時にもたくさんの利用者さんに「ありがとうございました」「さようなら」と大きく元気な声かけをしてもらった。私自身も気持ちが良く、本当は私たちから挨拶をするべきなのにととても嬉しかった。(女、2014.11.8、こもれびの里・こもれび祭)

#### ◆職員としての心構えを学んだ

・ボランティアを通して学んだことは、挨拶することの大切さ、その場に応じた声かけ、自分で判断するということです。挨拶は、されて嫌な人はあまりいないと思うし、笑顔で元気に挨拶すると清々しい気持ちになり、言った側も言われた側も嬉しくなるのではないかと思ったからです。

(女、2014.10.26、新生苑・ふれあいフェスティバル)

・新生苑に行く前は施設の方たちとどのように触れ合えばよいかのわからず不安でいっぱいでした。少し緊張しながら施設の中へ入りました。施設の中に入ると、温かな挨拶をして下さり不安

がずっと消えました。この時、改めて挨拶は人と人をつなぐ大切なものだと強く感じました。

(女、2014.10.26、新生苑・ふれあいフェスティバル)

・新生苑でボランティアをさせて頂いて学んだことが多くあります。一つ目は仕事をするこの大変さと責任感です。二つ目は笑顔の大切さです。三つ目は人と話すことの楽しさと嬉しさです。

(女、2014.10.26、新生苑・ふれあいフェスティバル)

・職員の方の仕事を見ていて、物を運ぶ途中や、すれ違う時など、どのような時でも利用者さんへの声かけを絶えず行っておられました。どんなに忙しくても笑顔で接しておられる姿がとても印象的で心に残っています。自分の仕事に加え、私たちボランティアの様子を見に来るなど、私たちの何倍も活動していて大変なのに、それを疲れた顔もせず笑顔で明るく声をかけておられて、すごいなと思いました。(女、2014.10.26、新生苑・ふれあいフェスティバル)

#### ◆自分の力不足を感じた

・今回のボランティアを通して、反省点や自分に足りない点がいくつもありました。それは、言われてから行動する、障害者の方から目を離す、対応力の遅さ、気持ちをあまり読み取れない、接し方が分からなかったことです。これらのことから、自分の力のなさを実感しました。(男、2014.10.12、溪明園祭)

#### ◆障がいのある人に対する偏見がなくなった

・障がい者について、私たちと同じように生活することや行動することはできないと勝手に思っていました。それは間違いで私は偏見を持っていたのだと知りました。片付けの時、職員の方やボランティアの人だけが片付けをするのだと思っていましたが、障がいを持った方も片付けに参加し共に協力する姿に、障がいの有無に関わらず、手伝いたいという気持ちがあって行動しているのだと思いました。これからは、障がい者の方とも協力し、誰もが自由に生きていける社会を目指すことが大切だと思いました。(男、2014.10.26、新生苑・ふれあいフェスティバル)

#### ◆職員としての心構えを学んだ

・ボランティアを通して学んだことは、挨拶することの大切さ、その場に応じた声かけ、自分で判断するということです。(女、2014.10.26、新生苑 ふれあいフェスティバル)

・職員の方は、物を運ぶ途中や、すれ違う時など、どのような時でも利用者さんへの声かけを絶えず行っておられました。自分の仕事に加え、私たちボランティアの様子を見に来たりと、私たちの何倍も活動していて大変なのに、それを疲れた顔もせず笑顔で明るく声かけをしておられて、すごいなと思いました。(女、2014.10.26、新生苑 ふれあいフェスティバル)

#### ◆自分の力不足を知った

・今回のボランティアを通して、反省点や自分に足りない点がいくつもありました。それは、言われてから行動する、障がい者の方から目を離す、対応力の遅さ、気持ちをあまり読み取れない、接し方が分からなかったことです。これらのことから、自分の力のなさを実感しました。(男、2014.10.12、溪明園祭)

これらの学生の感想を見ると、どの時期においても共通する感想が見られることが分かる。教育分野では、

- ・児童の実態を知ることができた
- ・スタッフから児童への接し方を学んだ
- ・自分の力不足を知った
- ・地域の中でのつながりの大切さに気付いた

保育分野では、

- ・子どもの実態を知ることができた
- ・保育士の仕事内容を理解することができた
- ・子どもたちが楽しく生活できるための環境構成の工夫に気付いた
- ・自分の力不足を知った

福祉分野では、

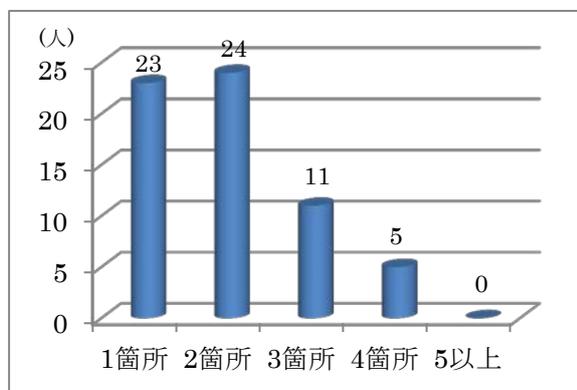
- ・和やかな楽しい雰囲気心が温まった
- ・障がいがある人への見方や考え方が変わった
- ・スタッフから対応の仕方や心構えを学んだ
- ・自分の力不足を知った

学生たちは、教育・保育・福祉で子どもや障がい者、お年寄りと交流する中で現場の実態を知り、スタッフの姿から利用者との接し方や対応の仕方を学んでいる。同時に、自分の力不足や未熟さを痛感させられている。

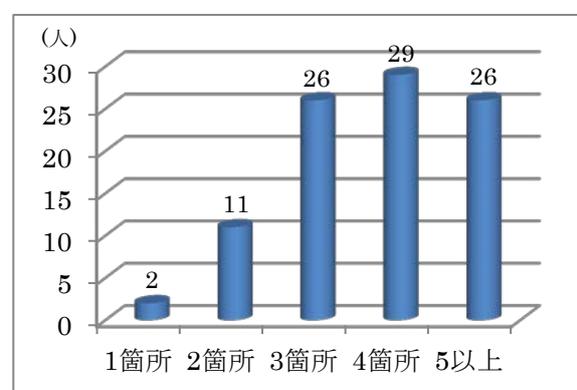
幼稚園教育実習、保育所実習、施設実習、小学校教育実習、介護等体験など、4年間でさまざまな実習を経験する学生たちにとって、1年次にこうしたボランティア活動を通して各分野の現場の姿を肌身で体験することは、その後の実習の事前学習として貴重だといえる。また、自分の力不足を知ること、これからの講義や実習で学ぶべきものが何であるか、学習のめあてをもつことができる。また、多くの活動を積み重ねることによって、自分の学びのあり方がより具体的に見えるようになる。

#### Q. 活動先は何カ所ですか。

2009年度



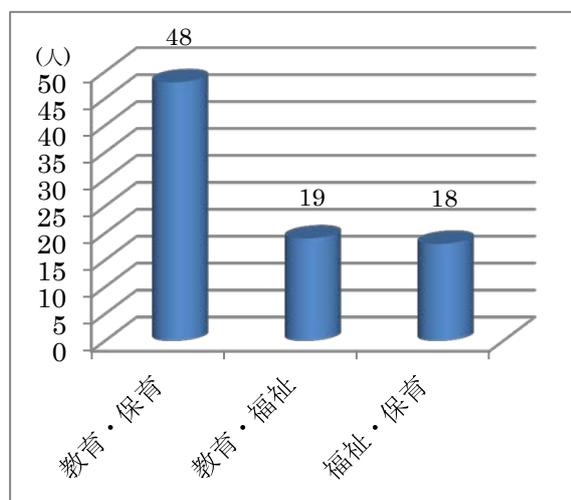
2014年度



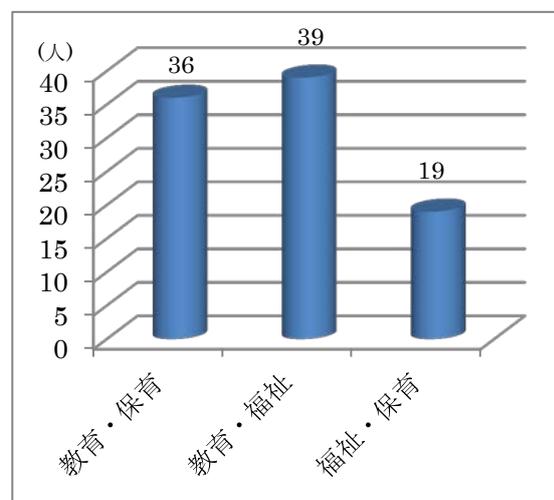
上記のグラフのように、2009年度より2014年度の方が活動先の数が増加しており、学生たちは多くの活動先で多くの経験を積んでいることが分かる。

Q. 2分野の組み合わせはどのようにしましたか。

2013年度



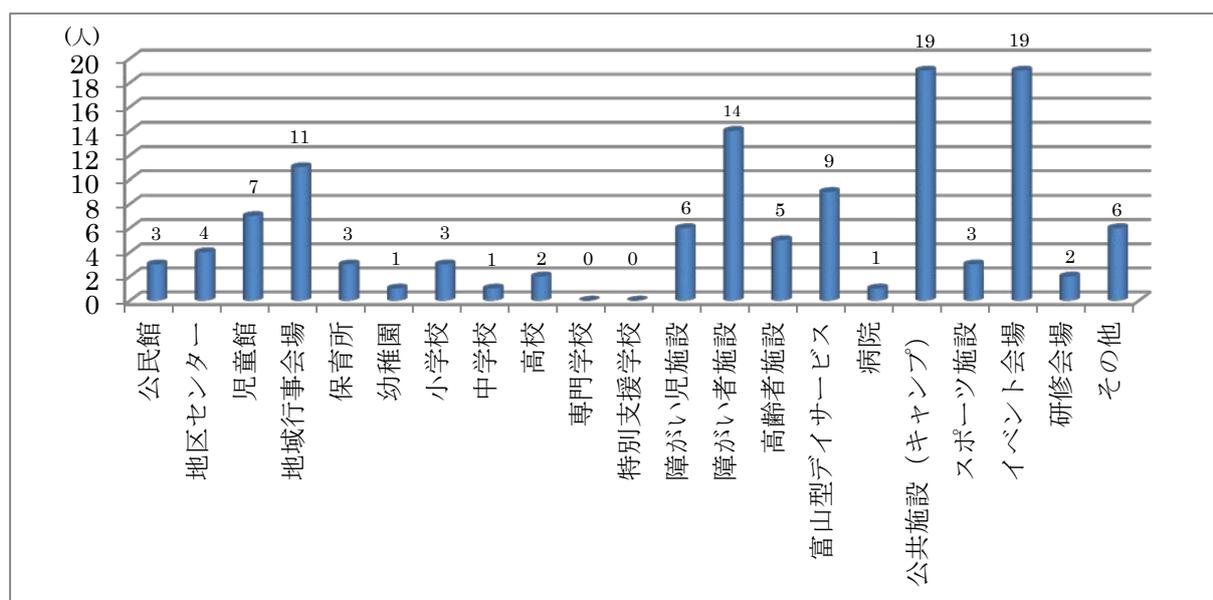
2014年度



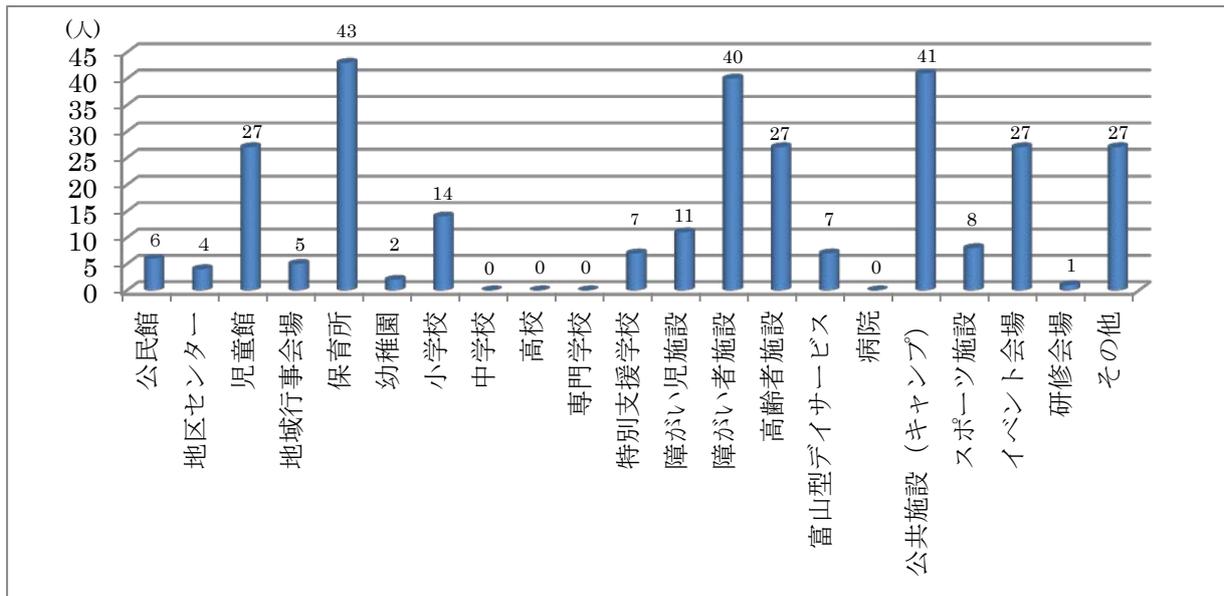
2013年度より、教育・保育・福祉の3分野から2分野×4時間=8時間、3分野およびその他の分野から12時間以上、合計20時間以上の活動を義務付けているが、初年度の2013年度が教育・保育分野の組み合わせが多かったのが、2014年度では教育・福祉分野、教育・保育分野の組み合わせの数がほぼ同等になっている。これによっても、学生たちが多くの分野での活動を経験していることが分かる。

Q. どこで活動しましたか。〈複数回答可〉

2009年度



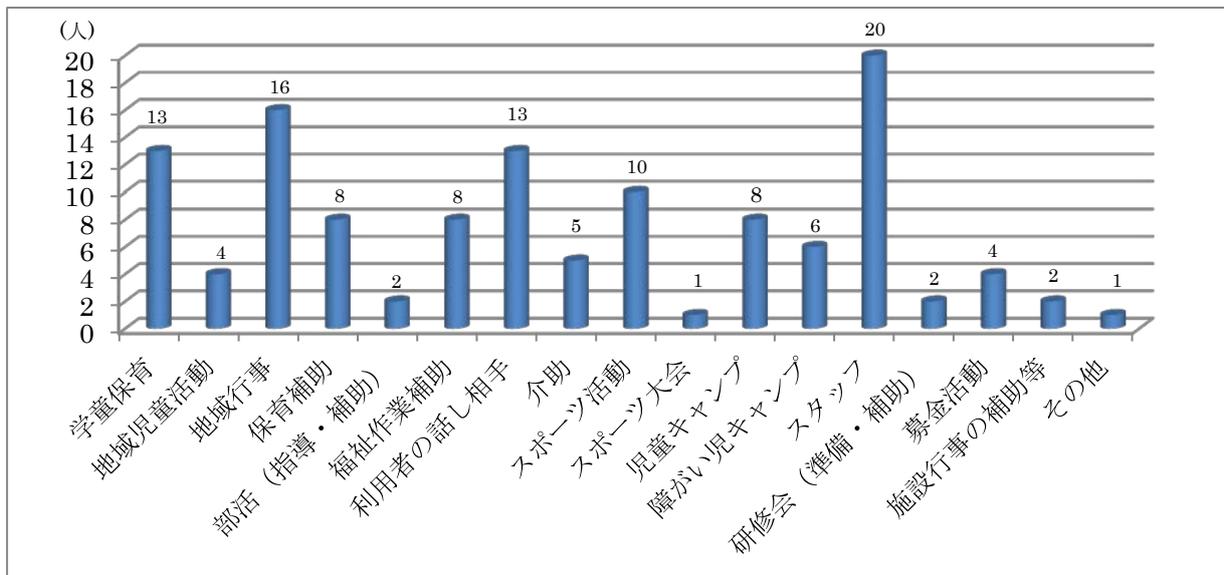
2014 年度



「どこで活動しましたか」の回答からは、学生たちが多種多様な場所で活動したことがよく分かる。2009 年度は、公共施設 (キャンプ)、イベント会場、障がい者施設、地域行事会場が多く、2014 年度は、保育所、公共施設 (キャンプ)、障がい者施設、児童館、高齢者施設、イベント会場が多い。

**Q. 活動内容は何ですか。(複数回答可)**

2009 年度



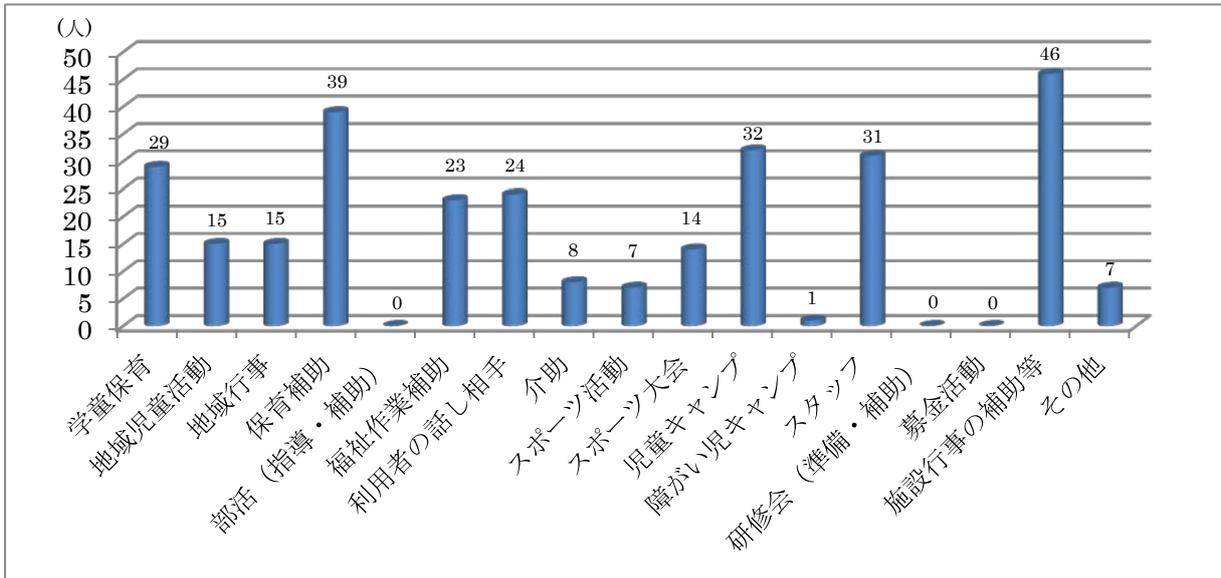
活動内容に関しても、2009 年度はスタッフ、地域行事、学童保育、利用者の話し相手、スポーツ活動、福祉作業補助、児童キャンプなど、多岐に渡っている。

2014 年度では、施設行事の補助等、保育補助、児童キャンプ、スタッフなど、さまざまな内容を体験していることが分かる。施設行事の補助が増加しているのは、本学の活動がよく知られ

るようになって、さまざまな施設からボランティア依頼が来るようになったためである。

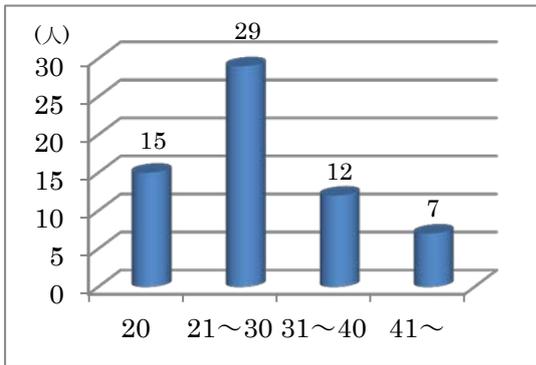
**Q. 活動内容は何かですか。(複数回答可)**

2014 年度

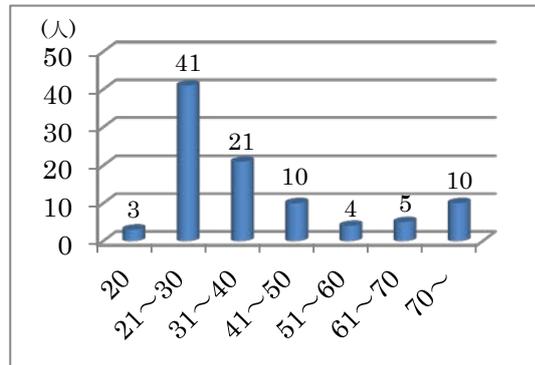


**Q. 活動時間は合計何時間ですか。**

2009 年度



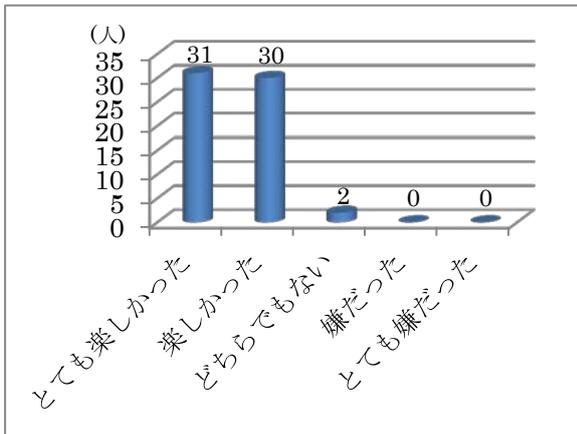
2014 年度



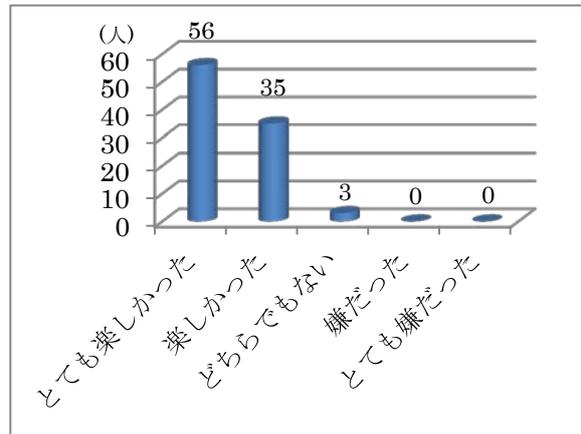
活動時間を見ると、2009 年度よりも多く活動した人数が増えていることが分かる。

**Q. 活動後の心境はいかがでしたか。**

2009 年度



2014 年度



活動後の心境を見ると、「とても楽しかった」「楽しかった」と回答している学生がほとんどである。また、当初「嫌だった」と回答していた学生で活動後も「嫌だった」としている学生はいなかった。

「最終活動報告書」から、「とても楽しかった」と記している学生の感想を抜粋する。

◆とても楽しかった

・一生懸命にボランティアをしたことで、地域の方々や、役員の方たちにたくさん感謝され、嬉しい気持ちでいっぱいになった。またボランティア先で出会った子どもたちと関わることはとても楽しいと感じた。活動前はボランティアがこんなに楽しいのだと感じるとは思っていなかった。

(女)

・ボランティア活動は貴重な学びの場なのだと気付くと共に、たくさんの人と触れ合うことができるボランティア活動の魅力を知ることができた。(女)

・人に素直に感謝することの大切さや、人に感謝されることの嬉しさを感じました。(女)

・参加してみると、どのボランティアも楽しく活動することができた。施設の利用者さんや、子どもたちの笑顔を見ると、元気がもらえ、こちらまで笑顔になっていた。(女)

・実際に行ってみると大変なこともあったけれど、楽しいと感じることが多かった。特に子どもと関わるボランティアでは、自分自身とても楽しむことができた。(女)

・私はもともと人と関わるのが好きなので、ボランティアを通して人と関わるができるということが楽しかったです。(女)

・活動に参加するたびに多くの人の笑顔が見られ、やりがいを感じるようになった。いつの間にかボランティアは楽しいことだというイメージが変わっていた。(女)

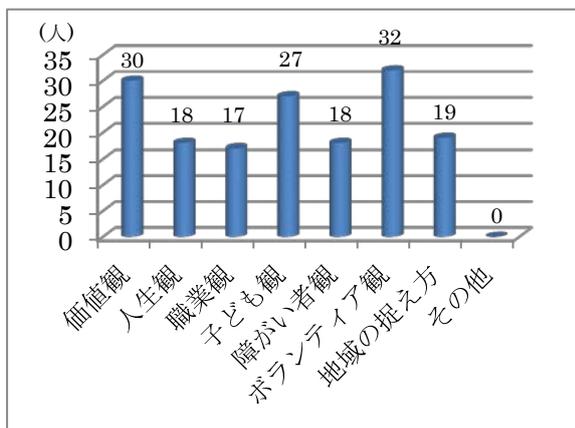
・人のために活動することの喜びや楽しさをボランティア活動で味わうことができた。(女)

・私は子どもと関わる教育や保育のボランティアが多かったのですが、子どもたちをまとめるリーダーとしての参加がとても楽しく充実していることに気がつきました。(女)

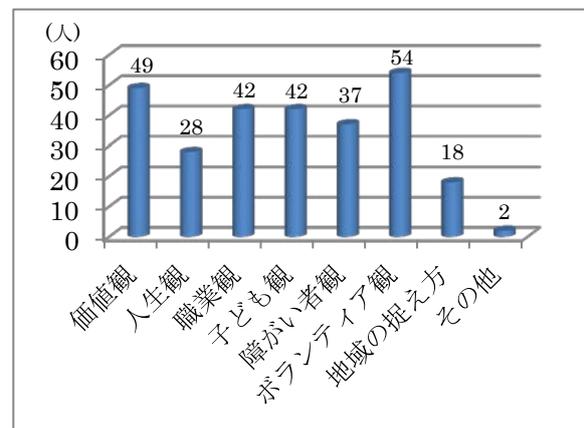
・最終日に子どもたちと別れる時、悲しくて思わず泣いてしまうと、今まで一度も自分から話しかけてくれなかった男の子が、「すー、バイバイ」と声をかけてくれた時、ボランティアってなんて素敵なのだろうと感じた。(女)

Q. 活動前と活動後の自分に何か変化がありましたか。(複数回答可)

2009 年度



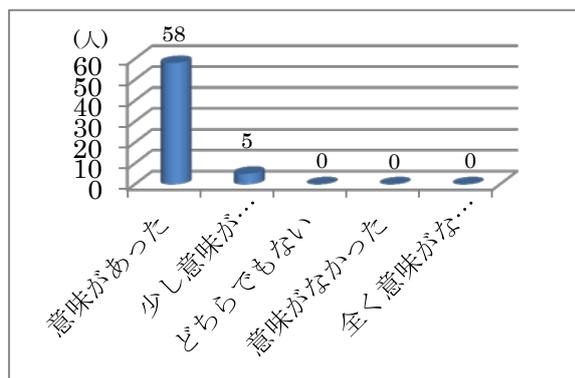
2014 年度



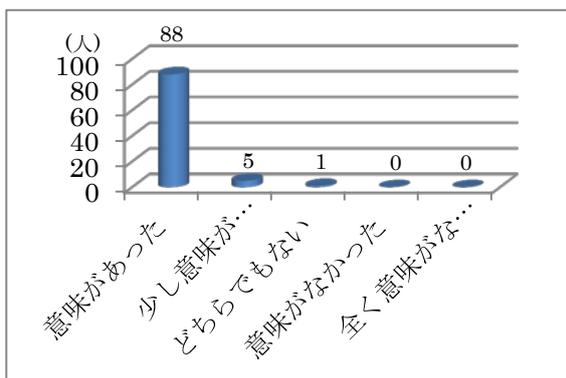
活動を通して、最も変化があったと回答している項目は、兩年共に「ボランティア観」となっている。最初ボランティアは人のために何かを行うという考え方だった学生が、何回も活動を重ねるうちに「ボランティアは自分のために行うもの」「ボランティアは自分磨きの場である」という考え方に変わっていく。いわば価値観の変化ともいえるが、子ども、障がい者、高齢者など、さまざまな人との関わりを通して、子どもや障がい者、高齢者に対する見方が変わるという点での価値観の変化も見られる。それは、人生観や職業観の変化にもつながっていく。

**Q. 地域活動をしてどうでしたか。**

2009 年度

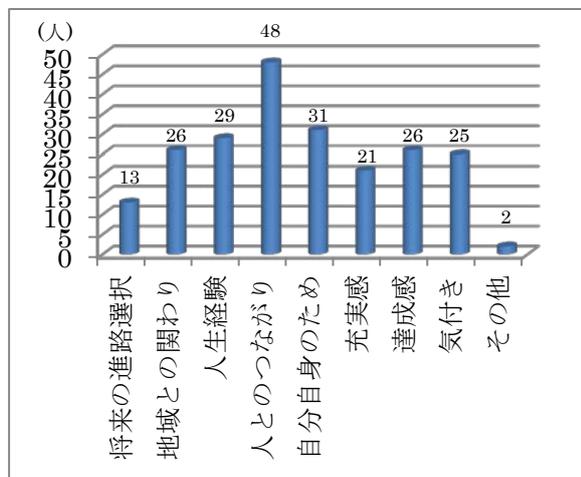


2014 年度

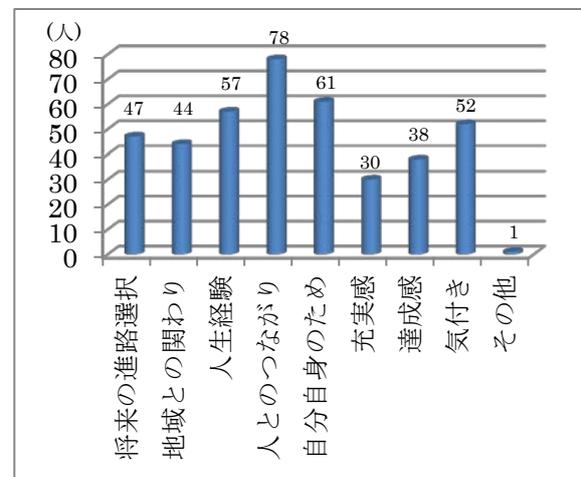


**Q. 地域社会参加活動はどんな意味がありましたか。(複数回答可)**

2009 年度



2014 年度



「地域活動をしてどうでしたか」という問いに対してほとんどの学生が意味があったと回答している。『最終活動報告書』には、そうした学生たちの生の声が出ている。

◆**人とのつながり**

- ・地域社会参加活動の意味とは、人との関わりが深くなる場だと思う。人と関わることに上手い下手は関係ないと思った。人と関わりたいと思うことが一番重要なのではないかと思った。(女)
- ・ボランティアを通して知り合った活動先の職員の方々はもちろんのこと、一緒に活動に参加した他の大学の同級生や先輩など自分が今抱えている悩みや不安をぶつけることができる存在が増えたことが一番大きい。(女)
- ・さまざまな年齢層の方々との出会い、関わりを持つことができるのも地域社会参加活動の「意味」

に挙げられるのではないだろうか。私は、ボランティア活動を通して、普段の生活では関わり合うことがないような人たちと出会ってきた。そして、どの出会いも私にとって重要なものとなった。(女)

#### ◆自分自身のため

- ・座学だけでは感じる事ができないことを感じる事ができ、自分自身を成長させる活動だと考えます。(女)
- ・活動前の自分よりも福祉に対する抵抗をなくす事が出来たのではないかと思った。(女)
- ・自分が成長し、変わる場だと思う。ボランティアはするのではなく、させていただくものだと思うようになった。(女)
- ・多くの人に出会い、多くのことを吸収し、今までの自分より成長する事ができたと思う。(女)
- ・気がつく私の中の地域社会参加活動の意味も変わっていた。単位から自分の成長へと目的が変わっていた。「意味」とは、「自分の成長のためのスパイス」ではないかと思う。(男)
- ・沢山のボランティアに参加して、ボランティアは全て自分のためになるものだった。(女)
- ・ボランティアは自分自身を成長させてもらえる場だと実感し、これが地域社会参加活動の意味だと思いました。(女)

#### ◆人生経験

- ・活動に参加する中で自分とは違った考え方、見方を持つ人たちと出会い、交流し、考えなどを共有したりしました。(男)
- ・様々な事情を抱え、家族がいて毎日家に帰り、一緒に過ごすことが当たり前ではない子どもたちが多くいるのだと、このボランティアに参加して感じる事ができた。(女)
- ・新しい世界に触れることでものの価値観なども変わり、視野を広げることが出来ました。(男)
- ・私は、ボランティアを通し、障がい者の方と接することで見える世界が広がったと思う。(男)

#### ◆将来の進路選択

- ・自分の将来の夢に必要な不可欠なものがボランティアには詰まっていると感じました。(女)
- ・これからの私自身の将来、進路を考えていくうえで本当に良い機会になった。(女)
- ・大学に入るまで進路について深く考えたことがなかったのですが、刺激を受けて色々な進路について考える機会になりました。(男)
- ・様々な場所に足を運ぶことにより将来の進路について学ぶ上でもとても良いと考えた。(女)
- ・このように地域に根ざした活動をすることで、将来の就職活動の際、この経験は心強い味方になってくれるでしょう。(男)
- ・地域社会参加活動に参加する前は、社会福祉の分野に進もうと考えていたが、保育分野も視野に入りたいと思っている。地域社会参加活動に参加していなかったら、自分の勝手なイメージや理想で進路を決めていたかもしれない。(女)
- ・私は将来子どもと関わる仕事をやりたいと思っているので、ボランティアとして子どもと関わったことは大きな経験になったと確信している。(女)

#### ◆気づき

- ・その施設には認知症の方が多くおられて、家族の話なども何度も話してくださり、施設にいても家族と一緒に暮らしたいという思いは変わらないのだなと思いました。(女)
- ・めひの野園では小学生・高校生の音楽の発表があり、スタッフや利用者もみんな楽しんでいました。障がいのある方々も楽しむポイントは健康な人と同じということ学びました。(男)
- ・各年齢の発達段階についてしっかりと勉強し、理解することの重要性を知った。(女)
- ・障がい者の行動全てを助けるべきだと考えていました。しかし、その考えは間違っていた事に気づきました。(男)
- ・保育士や幼稚園教諭、小学校教諭や社会福祉士を目指しているうえで、実際に現場を見て知識と経験を増やしていくこと、今の子どもたちがどのような環境で育っているのかを知ることができる大切なものだと思っている。(女)
- ・子どもと関わっていると、どうしても何か手助けをしたくなってしまいます。しかし、そこで何でも手を貸してしまうと、子どもたちの成長を妨げることになってしまうということを教わった。(女)

#### ◆地域との関わり

- ・今回のボランティアでは地域のたくさんの方と関わることができた。地域の方々と、地域の子どもたちがかかわっているのを見て感じるのがたくさんあり、学ぶこともたくさんあった。(女)
- ・地域の一員として、地域の人たちと活動する事が出来て嬉しい。私の知らない地域社会を少しは知ることができたと思う。(女)
- ・大学を出て社会の中で活動することによって、地域の方々と関わりの大切さ、社会参加することの責任を学ぶことが出来ました。(女)
- ・まずは身近にある地域から学び、知識を増やし、そして次は私たちがその知識をもとに地域のことを伝えていくことが大切であると考えた。(女)
- ・学童で子どもたちや保護者の方々など地域の人々と関わる中で、地域の行事にも参加してみようかなという気持ちになることが多くなった。(女)

## VI 終わりに

以上、「地域社会参加活動」がもたらす教育的効果について見てきたが、学生たちにとってこの活動はさまざまな学びの場となっていることは確かである。それは例えば次のような事項である。

- ・人と関わる喜びや大切さを知る。
- ・他の考え方や感じ方を知る。
- ・活動の際の基本的なマナーを知る。
- ・自分の力不足を知る。
- ・施設の職員や先輩から配慮事項や人との接し方、仕事の仕方を学ぶ
- ・児童や園児たちの実態を知り、その後の実習の事前学習となっている。
- ・将来の進路を考える良い刺激となっている。

- ・幅広い視野がもてるようになる。(特に福祉分野)
- ・交流の広がり(地域の人たち、施設の職員、先輩、他大学の学生など)

学生たちは、1年の最初と最後では大きく変わっているように感じる。それは、さまざまな学習の場で意欲的に活動に取り組もうとするようになる、緻密に物事を進めて行こうとする姿勢が見られるようになるといったことがらである。それは、学校の中だけでは身に付かない力である。地域社会参加活動を通して身に付けたそうした力をどう伸ばしていくかが今後の課題である。

#### ■参考・引用文献

- ・室林孝嗣・本江理子・村上満『「地域社会参加活動」の意義と課題』  
(『富山国際大学子ども育成学部紀要第1巻』、2010年3月)
- ・赤尾秀康『ボランティアの養成ー資質向上の工夫』  
(ボランティアコーディネーター研修 2014.3.10 資料、国立立山青少年自然の家)

#### ■聞き取り調査

- ・2014.11.20 国立立山青少年自然の家  
 応対者 所長 中舎喜博氏 企画指導専門職 赤尾秀康氏  
 聞き取り 堀江英一

#### ■備考

本研究は、平成26年度財団法人富山第一銀行奨学財団の研究助成のもとに実施したものである。